
とある偽善の風紀委員長

クズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある偽善の風紀委員長

【Nコード】

N3419Z

【作者名】

クス

【あらすじ】

僕は自分が正義だとは思わない。かと言って悪だとも思っていない。正義の味方ではないし、悪の大王という訳でもない。僕はただ皆に感謝されたいだけの偽善者。

それが、”肩書きだけの正義”である僕だよ

ブログ 偽善者（前書き）

皆さん、初めまして、もしくはこんにちは

にじファンのリアルで親しい作者様から頂いた
設定を下に連載を始めました

過負荷サイドではなく科学サイドを書きたかった故の
気分転換のような小説ですが、どうぞ

プロローグ 偽善者

真夜中の路地裏

光は一切差し込まず、歩道に設置されている
街灯すら届かないような漆黒の空間

暗黒の道を、一人の少年が逃げ惑うように走っていた

後ろにはそれを追いかける人影

手にはナイフを持っているその人物は、
ただただ逃げる少年を追いかける

どういう状況かと言うと、少年は狙われていた

所謂通り魔

無差別に人を殺す、話題性しか求めている殺人鬼

そんな人物から必死に放念は逃げていた

角を曲がれば公園を駆け抜け、フェンスを登れば橋を渡る

ありとあらゆる場所へと逃げるが、一向に殺人鬼が
諦める気配は無い

体力も徐々に少なくなっていく

そんな中、少年には一つのアイデアが浮かんだ

「どこかのコンビニに行けば…！」

通常、二十四時間開いている場所の多いコンビニ

つまり、そこには人が、従業員が居る

そこでなら助けを求めることも、身を隠すことも出来る

そう考えた少年は、自分の知っている一番近い
コンビニへと全力疾走し始めた

そして、とうとう目当ての場所へとたどり着く

明かりも着いており、中には床を洗う従業員の姿が見える

希望の光、命の安全

そう感じた少年は、真っ直ぐコンビニへと走ろうとする

その刹那

「ひっ!？」

とてつもない握力で肩を掴まれた

恐る恐る後ろを振り返る

「う、うわあああ!!!」

真後ろには、帽子を被りナイフを持っている通り魔

その姿に叫び声を上げる少年だが、それも
虚しく地面へと押し倒される

体格からすれば大学生ほどの男に乗られた少年は
身動きがまったく取れない

腕も足の間に挟まれ動かせない

絶体絶命というピンチの中、男は徐々に腕を振り上げる

観念した少年だが、そこであることに気付いた

男の後ろから、別の人間がこちらに向かって歩いてくることに
少年は気付いた

無意識に少年は叫び始める

「た、助けてください!」

その声が届いたのか、その人影は
直ぐ真横で立ち止まった

パーカーこそ着ているが、制服を着ている所から
学生らしいその人影はただただ少年を見詰めている

「助けてください！ 殺されます！」

そう悲願する

すると、少年は目を見開いた

その人影は少年に見向きもせず歩き去っていった

そのままその人影はコンビニへと入っていく

希望の光から絶望の闇へと堕とされた少年の表情は、最早形容できるようなものではなかった

「ぎゃあああああ！！！！！！！！」

男は少年の腹にナイフを突き刺した

それを止めるものはなにも無く、無抵抗に刃は腹へと突き刺される

痛みで少年は声を上げた

すぐさま男は少年の腹部からナイフを取り出す

そこからは血が滝のように流れ、少年の着ている制服は赤く染まっていく

「ガアアア！！ ぎゃあああ！！！！！！」

その後も、何度も男はナイフを振り下ろした

何度も、何度も、何度も

「痛え…痛えよ…」

声すら上げられなくなっている少年

全身を何度もナイフで刺され、周りは
血の海と化している

そんな中、ガサガサとビニールの揺れる音が聞える

何かと思い、朦朧とする意識の中その方向へと視線を向けた

再び立ち止まり、二人を見詰めているのは、先ほどの人影

レジ袋を腕へ通し、フードを被ったその人物

それは真っ直ぐこの現場を目視している

「頼む…助けて…くれ…」

最後の悲願

僅かな希望を胸に、そう問いかけた

「やだよ。めんどくさいし」

そう即答する人影

最後の最後で希望を潰された少年の意識は、
そこで永遠に途切れた

そこに残ったのは、全身を刃物で刺され、
最後に首を貫かれていた死体

血の海に沈んでいる少年とそれを起こした犯人

犯人は殺したのを確認すると、立ち上がる

その瞬間

「——！！」

犯人の思考が停止した

目の前には現場を目撃した学生

勿論、それを見過ごせるはずが無くこの少年同様に
殺そうとする犯人だが、身体に力が入らなくなっている

男の額から流れ出ているのは、赤い液体

その目の前には、何処から取り出した銃口を向けている学生

「ゴメン、敵討ちだよ」

あっけらかに、気楽にそう学生は言う

ドサッと男の身体は地面に倒れた

この場に現れたのは二つの死体

だが、その学生はそれにまったく動揺していない

「ほら、仇を討ってあげたよ？ 感謝してよね」

懐へと銃を仕舞う学生

そのポケットからは、緑色の腕章がはみ出していた

プロローグ 偽善者（後書き）

初っ端から二人の死者を出してる（笑）

この小説、この先大丈夫だろうか…

第一話 第四位（前書き）

駄目文ですが、どうぞ

第一話 第四位

「ん…？」

明るい光が窓から差し込み、目を照らしている

外からは学校へ向かう途中の学生たちが友達と騒いでいたり、小鳥が心地よく鳴いている

朝の独特な空気と活発さにより僕は目を覚ました

「ふあああ…」

大きな欠伸をしながら、布団から這い出る

未だに脳が覚醒状態へと突入していない所為か、まだ少し意識が違う場所に旅立ってしまう

頭を掻きながら、僕は真っ直ぐ冷蔵庫へと向かった

無造作にそれを開けると、中身を詮索する

缶ジュースとソーダ

それが冷蔵庫の中身

ビッシリと敷き詰められているその炭酸とジュースは

見るからに僕の生活習慣の不健康さを示している

その中から一本の炭酸飲料を取り出すと、朝っぱらから
ということに無視し飲み始めた

一旦それをテーブルの上に置くと、今度は一つの棚を開ける

その中から取り出したのは一つのカップラーメン

ポットに水を入れ、お湯が熱くなるまで僕はテーブルに座り込んだ

また一口ソーダを口に含みながら、何気に部屋を見渡してみる

……我ながら不健康な生活をしていると思う

飲み物なんてジュースとソーダしか無く、自分の一人暮らしの
人生ではカップラーメンしか食したことが無い

そんな不健康の見本みたいな僕だが、別にこれが嫌いなわけじゃない

部屋の中には布団、テレビ、卓袱台以外は置かず、
意外にも片付いていると自重している

服なんて今着ている制服以外は無いし、常にその上に
パーカーまで着てるから汚れる心配も無い

幾らトイレ風呂キッチン付きでも一部屋だけしか無い
という幾らか小さい部屋だけど、それも不自由には感じない

一人暮らしにはこれこそ一番快適だと思っている

食料も安いし、飲料なんてそこら辺の自動販売機で纏め買いできる

お金にも困らないし、わりと自由な生活だ

そんな事を思いながら、僕は出来上がった食事を啜る

食べ終わると、何気無くテレビを点けた

別に見たいものなど無いけど、ずっと音を発しないこの空間を虚しく思ってたんだ

点けた瞬間、僕の目にはあるニュースが飛び込んできた

《昨夜、死体となって見付かった男性が二人ほど発見されました》

そんな見出し

だが、そんな事に何の興味も示さず、リモコンを取りチャンネルを変える

次に飛び込んできたのは、少し興味深いニュース

《新しくレベル5が誕生しました》

学園都市レベル5の超能力者

超能力という不思議な力に溢れ、その中でも

頂点と言われているレベル5

それに新しく認定された人物が居るそうだ

《その人物の名前は御坂^{みさか}美琴^{みこと}。能力はレベル5の電撃^{エレクトロマスター}使いです》

「…へえ」

それに僕は素直に関心した声を漏らす

なんでもレベル1から5まで這い上がった

努力者で、あのポピュラーな能力の頂点へと君臨したらしい

決定された序列は第四位

レベル1から5まで上がった彼女は研究対象としてかなり有望されてる故に、一気に四位となっていた

レベル5の序列は研究対象としての序列で、
彼女は其中で四番目

元々七人居たレベル5だけど、彼女が加わり八人となった

その中で四位とは、それなりに期待されてるって意味だ

あはは、誰かは知らないけど可哀想に

初っ端からこんなに期待されるなんて、
僕だとプレッシャーに押し潰されちゃうな

「よいしょつと」

それだけ見終わると、僕はテレビを消し、自室を出た

現在、僕は適当に道を彷徨っている

学生はこの時間には学校へ行かないといけないんだけど、僕はそれに特に気にすること無く堂々とサボっている

別に不登校児な訳ではない

僕が所属しているのは長点上機という学園都市屈指のエリート校だ
自慢のつもりじゃないけどね

そんなに良い学校に通ってる僕だけど、
実はというと殆ど登校していない

所謂”書類上の生徒”だ

一応はこの学校に入学しているけど、それはただの
表向きで実際にはほぼ毎日サボっている

それでも何も文句を言われないのは、実はちょっとした理由がある
んだ

ま、それはまた別の機会まで取っておくけど

僕は丁度良く公園を見つけると、そのの
滑り台へと寝転ぶ

そこでポケットから飴玉を取り出し、口に放り投げる

基本的にはここで一日を過ごしている

僕の普段の睡眠時間は夜も含むと約十六時間だ

そこまで寝る必要は無いけど、まあ
することが無いからね

そうなるんだったら学校に行けよ、とか思つかも
しれないけど、生憎と僕はそんな場所には行かないよ

勉強とか嫌じゃん？

面倒だし、何より簡単過ぎるし

勉強しないんだったら態々学校に行く必要は無いし、
たとえば行ったとしてもずっと寝てると思う

それは学校に失礼だよ

そんなことを胸に、僕は思考をシャットアウトする

心地よい朝の風が僕の髪の毛を揺らす

それに僕は意識を手放し、睡魔という名の楽園に身を預けた

「ふにゃ……？」

そんな猫みたいな声を思わず漏らしてしまった

あれからどれぐらいが経っただろう？

僕は周りの騒がしさに目を覚ましてしまった

見渡してみると、歩道には帰路へと着いている

学生たちが歩いていたり、放課後の遊びに向かう生徒が見える

おそらく僕が寝ている間に登校時間になったんだろう

つまり、寝てた時間は大体六時間ぐらいかな？

「あ、起きた」

誰かは分からないけど、そんな声が右方から聞える

その声が発せられた方向へと首を回す

僕の隣に立っているのは、一人の女子生徒

まだ幼さがあまり抜けていない、それでも

お子様というレベルの若さでもない、そんな微妙な年頃

制服はかの有名な”常盤台中学校”の制服

超能力の開発で有名なその名門校は僕たち長点上機にも劣らないほどの知名度のエリート校だ

つまり、目の前の子は中学生という意味だ

茶髪で女の子にしては少し短い髪

まあ、普通な子だ

でも何故か僕に話し掛けている

僕は立ち上がりながら、彼女に質問した

「君は誰かな？」

立ち上がってみると、改めて虚しさを感じる

高校生のはずの僕が、中学生であるこの人より十センチは低いんだ

改めて僕は自分の身長の高さを呪った

「あ、ゴメン、公園で寝てたからつい…」

まあ、こんな怪しい外見の人が公園で寝てたら誰しもが不信に思うけどね

それでも、話しかけてくる彼女は少し根性があるみたいだ

「私は御坂美琴、ただ公園で寝てる人が居たから変だと思って」

「変で悪かったね。まあ、こんな格好の人だそう
思われるのは仕方ないことだよ」

フードを目元まで被っていて見えているのは
鼻と口、そして少量の髪だけだからね

それだと思いつきり不審者だ

ん、待てよ

御坂？

「君、もしかしてレベル5第四位の御坂さん？」

「え？ あ、そうだけど…どうして知ってるの？」

案の定、それはやはりあの御坂さんだった

「ニュースで結構話題になってたよ？ レベル1から5まで努力で
上がったから人気だし、なによりまだ中学一年生だからね。これは
将来

どれぐらい化けるかが楽しみだよ」

「えっと…ありがとう。何か認定されてからずっとこうなんだけど
…」

「その内慣れると思うよ？ ま、頑張ってね」

僕はポケットからもう一つの飴玉を取り出し、再び口の中に放り投げる

既に食べていた飴はいつの間にか溶けていた

苺味のドロップを口の中で転がす

コロコロと音が鳴るなか、僕は話を続けた

「その歳でレベル5になるって凄いなあ。僕では衝撃だよ、そんな歳でなれるなんて」

「そこまで大したことじゃないわよ。それよりアンタ」

僕にも馴染んできたのか、口調が少し遠慮が無くなっている

まあ、それだと僕も堅苦しくなくて済むんだけど

「ん？」

「その腕章、アンタ風紀委員なの？」

僕の制服のポケットからはみ出ている腕章を見てそう言う

風紀委員、この学園都市を守護する存在であって、学生たちで構成されている警務機関だ

主に刑事的な役割を果たす、警察のような組織だ

それに僕は一応は属している

「あ、うん。大分前からだけどね」

「大分前って、アンタ何歳なの？」

僕の身長からすると多分中学生、もしくは小学生と勘違いされてもおかしくはない

そんな子供みたいなのが、大分前って言うたら、やっぱり不思議には思っただね

「僕は列記とした高校生さ。長点上機学園に在学してる立派な青年だよ」

「…ええ！？」

本当にビックリしたように叫んだ

そんなに驚かなくてもいいのに…

「け、けど！ アンタ私より背が小さいし…」

「僕は成長が遅いんだ。もう伸びるのは諦めてるけど」

その証拠に、僕は小学校六年辺りから身長が伸びなくなった

成長期すら来ていない、可哀想な人間さ

「なら、私より全然年上よね？ 私まだ
中学校に入っただけだし」

「別に敬語で話さなくてもいいよ？ 僕はそういうのは苦手だしね
それに彼女、敬語なんて似合わなさそうだしね

「そういえばアンタも超能力者なの？」

僕が長点上機という超能力で有名な学校に属していることから
興味を示したらしく、僕的能力について訊いてくる

「ま、まあ一応わね」

「ならレベルは？ やっぱ長点上機とかだから4？」

うーん、答えにくいなあ

ここは曖昧に返事しておいた方が良さそうだ

「うーん、それぐらいかな？」

「それぐらいって何よ？ まあいいわ。レベル4ぐらいなら、
やっぱりそれなりに強いんでしょう？」

頭からバチバチと火花が出ている

何か嫌な予感が…

「アンタ、私と勝負しなさい！」

なんでやねん、と突っ込むのを僕は必死に堪えた

「何故僕？ 第四位の君なら僕なんかボコボコに出来るだろうし、僕だって痛いのは嫌だし」

「レベル4がそんな弱いわけないでしょ。悪いけど、問答は聞かないから」

彼女の身体に電気が発電され始める

それは徐々に大きくなっていつて、やがては少し近くに居るだけなのにその電圧を感じられるまでになっていた

へえ、これがレベル5の電撃使いの能力なんだ

電力と電圧は普通の電撃使いと比べ物にならない

「ってちよつとー！？」

僕は攻撃を放とうとする彼女から全速力で走り去った

幾らなんでも電撃とかはカンベンしてよ…

「逃がさない、わよ！」

そんな背中を向けながら走っている僕に向かって、御坂さんは槍の形をした電撃を放った

それは真っ直ぐと僕の背中に向かっている

「ちょ、背中を向けてる人に攻撃とか——」

そんな発言も虚しく、大きな爆発音と共に
辺りが煙に包まれた

「ゲホツ…外道め！」

その煙の中から僕は咳き込みながら出てきた

危うく死ぬところだったよ…

「今のを避けたの？」

「う、うん！　そ、そうだよ！」

少し噛みながらも僕はそんなことを言ってしまった

それに彼女は不審に思ったのか手を組んでなにか
思考するように考え事をし始める

「アンタ知ってる？　雷の速さっておよそ秒速200キロなの。
今のはそれを再現して撃った攻撃なんだけど、何でそれをアンタが
”避けられる”訳？」

…最悪だ

僕は彼女の攻撃を避けてなんかいない

いや、それどころか目視すらしていない

そこまで速かったとは分からず、思わず
アンナ下手な嘘を言ってしまった

「レベル4程度がこれを避けられる訳ないし、アンタ何者？」

さっきのフレンドリーな態度から打って変わって
少し警戒したような目つきに変わっていた

ああ、何で僕ばかりこんな目に…

「…あ！ あそこにあるのは何だ！？」

明後日の方向に向かって指を差す

それに釣られ、彼女もその方向に視線を向けた

「あ、待ちなさい！」

その隙に僕は全力疾走した

後ろを追ってくるのは、やっぱりあの御坂さん

御坂さんは気を取られていた所為か、かなり
後方を走っていて直ぐにでも逃げ切れそうだ

だが、そこで問題が発生した

僕は所謂”引き籠もり”なんだ

殆どは部屋に居たり、寝てたりとダラダラとしている生活

食生活も不健康の極まりだ

そんな事を毎日繰り返していたら必然的に…

「ぜえ…ぜえ…」

僕の体力は塵屑レベルになっている

どんどん失速していく

それに対し、健康な女子校生である彼女は
かなり高いペースで追い上げてくる

こうなったら仕方が無いね

「ん？ なにこれ？」

僕は彼女に向かって一つの物体を投げた

缶ジュースのような形をしているそれを見
て、御坂さんは不思議そうに言う

だが、僕は目と耳を思いっきり塞いでいる

「わッ!？」

大きな音と発光が発せられる

これは学園都市製のスタングレネードだよ

通称フラッシュユバン

およそ二十秒間の間敵は視界と聴覚を奪われ、
衝撃により身動きもままならなくなる

「じゃあねー！」

道端で彼女が悶えている隙に、僕は
走り去った

とある路地裏へと逃げ込み、そこで一息つく

だが、休む間もなく僕の携帯が鳴った

「はあ……」

それを開け、届いたメールの内容を確かめる

「またかよ……」

そのメールを確認するや否や、僕は盛大な溜め息を吐く

その内容は至って簡単なものだ

《暗殺命令》

そう四文字で記されていた

第二話 暗部関係者（前書き）

この小説は完全に作者の自己満足小説です

今回、最後の辺りにオリキャラが登場します

この作品ではオリキャラは出来るだけ
少なくしたいと思います。

一人だけが一番自分としては理想的ですが

駄目文ですが、どうぞ

第二話 暗部関係者

僕は今、とある学区の区域を歩いている

時刻は深夜

肌寒い夜の所為で僕は思わず身震いをする

空を見上げると、そこには漆黒の夜空とそれに
比例し一層輝きを増している星

とても綺麗な夜空に、僕は目を奪われた

今から僕の行うことには相応しくないほど

美しい光景

途方に暮れたような乾いた笑い声を漏らすと、僕は再び歩き出した

今向かっているのはこの学区でも有名な無法地帯

武装集団やスキルアウトで溢れているその区域の

中でも最も奥深くに位置している場所に、僕は向かっていた

目的は今日もらったメールのため

『暗殺命令』

一見高校生である僕とはかなり縁遠い言葉だが、
実はそうでもなかったりする

暗部組織

学園都市の裏社会で活動し、表沙汰にならない
ような事件などを処理する組織は総称してこう呼ばれる

目的は様々だが、ロクでもない連中なのは確かだ

僕もその裏社会の一員

でもだからと言って僕は暗部組織に属しているわけじゃない

僕はこの学園都市の闇の上層部、そういう人たちからの
依頼を受けて、報酬と引き換えに実行する、いわば傭兵みたいな人だ

あの某依頼成功率99.9%の超人スナイパーとは違うけど

今回の僕の依頼は、やはり上層部から

内容は、統括理事会へ反抗的かつ危険な
行動を起こしているという組織のリーダーの暗殺

まあ、暗殺という名の組織の壊滅だけど

基本はいつも見付かって結局組織を壊滅させないといけなくなる

「わあ………典型的な隠れ家だね」

たどり着いた場所は廃墟となった倉庫

その中からは明かりが漏れていて、話し声も聞える

明らかに中に人が居る

ドアの前まで行くと、僕は遠慮なくそれを蹴り破る

「なッ!？」

中でテーブルを囲みながら話していた眠つきの悪い男達は一斉に僕を見た

突然の突入に全員が目を丸くしている

「誰だてめえ？」

「ええ、ご機嫌よー！ 実は統括理事会から君達が反発的な行動を取るので残滅せよ、とチクリがありました！ですから無抵抗に殺されちゃってください！」

笑顔で元気良く僕はそう言った

しばらくお互いを見る男達

すると、一人の男が「ククク」と笑い出した

それに便乗し、一人、また一人と加わる

『ギャハハハハ!!!』

やがて、この倉庫は幾つもの笑い声に包まれてしまった

数十人の大の大人達が居るこの狭い空間での大爆笑もあってか、普通よりかなり声が響き、自然に大音量になった

「おいおい、統括理事会もとうとう人手不足になったのか？
こんなガキなんぞ寄越しやがって。こりゃたまげたぜ」

「おいガキ、痛い目に遭いたくなかつたらとつとと
出て行くだな。もし出て行かねえんなら、斬り刻むぜ？」

そうリーダー格の男が言うと、僕の直ぐ隣を突風が通った

唐突にやってきたその風は明らかに
自然に発生させられたものではない

後ろを振り向くと、壁に綺麗な弧が出来ていた

「うーん…ざつと見るとレベル4の風力使いかな？
かまいたちみたいなのを出すとか、凄いね」
エアロシユター

「へ、強がるのんは止せよ」

勝ち誇ったように笑みを浮かべている

それに呼応し、倉庫の男達が一斉に能力で威嚇してきた

火球、雷撃、水流、様々な超能力が頭上や
身体の周りを通り過ぎる

中には大能力者レベルの能力があるけど、殆どの連中はレベル3程度だ

つまり、まあ余裕だね

「へえ、そうなんだ。なら教えてあげるよ。」

ガキを嘗めんじゃねえぞ」

その瞬間、全員が天井に激突していた

まるで下から吹き飛ばされたかのように打ち上げられた
全員は、勢いに任せて天井へと激突する

「がはッ!？」

そして、そのまま重力に従って落下した

地面に激しく身体を打ちつけ、悶絶する男達

僕はそれを笑いながら見詰めていた

「小さいから小学生と思った？ 残念、僕は
列記とした高校生さ」

「高校生だと…？ 待てよ…」

フラフラとリーダー格の男が立ち上がった

そして、僕を見ながらなにかを呟いている

「黒いフードのパーカーに、高校生とは思えない背丈…お前まさか…！」

暗部関係の仕事を多くやっているため、僕の

噂は離反している組織にはそれなり知られているみたいだ

特徴の一つとして背丈を記憶されるのは不本意だけど

「インサイドアウト 逆境定式か…？」

そう呟く男

それに僕は関心したような声を出す

「へえ、僕のことを知ってるんだ？」

「マジかよ…そんな奴に俺達は…」

「ま、遅かれ早かれ君達は殺される運命だったんだよ。
それを早めに与えてあげたんだ——

——感謝してよね？」

僕は男の直ぐ真横にまで迫る

彼は恐怖で支配された目で僕を見詰めている

「ク、クソがアアア！！！」

男は最後の悪あがきなのか、自身の能力を僕に向かって放ってきた

だが、それは僕に直撃することは無かった

血飛沫が辺りに飛び散る

「うわぁ、服が台無しだよ。これ一着しか無いんだからね？」

直ぐ真横に居たため、必然的にそれは大量に僕の服に付着してしまった

制服のシャツはパーカーで汚れていないけど、肝心のパーカーとズボンが台無しだ

はぁ、洗うの面倒だなぁ

僕は汚れてしまったパーカーを久しぶりに脱いだ

改めて思うけど、フードを被らないところも落ち着かないとはね

思わず拳動不審になってしまいそうだ

僕はずれている自分の眼鏡を正し、ネクタイをしっかりと締める

まあ基本はワイシャツはズボンから出していてだらしない格好なんだけどね

「はあ、やっぱりこの顔は嫌だな」

自分の顔を触りながら僕はそう呟いた

はつきりと言うと、僕は完全に童顔なんだ

高校生にはとても見えなく、背の低さもそれをより一層に引き立てている

その所為か、滅多に高校生には見られない

「グ……！」

突然、地面で気を失っていたリーダー格の仲間たちが異様に苦しみだした

目を見開き、もがきながら手足をバタバタさせている

やがて、泡を吹きながら全員が動かなくなる

「残滅完了、つと」

全員の絶命を確認すると、僕はメモ帳を取り出した

午前十二時四十三分、離反組織の残滅完了

そう書き入れると、ボールペンとメモ帳を
ポケットの中に突っ込む

今度は携帯を取り出し、先ほど依頼を送ってきた主に
メールを返信する

ただ一言《依頼完了》と書き、メールを送信した

依頼などに使い口座は予め教えているため、
そこに振込みを確認すれば大丈夫だ

依頼完了のため、僕はそのまま倉庫を出ようとする

だが、少し立ち止まり、動かなくなっている男達の方へ振り返る

「学園都市レベル5第三位、インサイドアウト 逆境定式のかたきは榎原秋でした」

○ ● ○ ● ○ ● ○ ● ○ ●

次の日の朝、僕は再び起き上がる

今日は土曜日、つまり休日だ

土曜日といえば朝は早く起きて、昼は思いっきり遊んで、

夜は遅くまで夜更かしするという学生にとっては最高の一日である

でも、中には例外だって存在する

そう言う僕もその一人だ

僕は友達がまったくと言って良いほど居ない

レベル5という表向きの立場と暗部組織関係者という

裏向きの立場上、そういう存在は今まで一度も体験したことが無い

元々高校どころか中学すらマトモに行っていない

いや、行っても意味が無いって言ったほうが正しいかな？

元々色々と好奇心旺盛で新しいことを『知る』のが

好きな僕は、昔から大抵の常識は既に自分で習っていた

だからなのか、中学に行ってもそれは幼稚園に感じられるぐらい

簡単で、

高校を一度だけ見学に行ったけど、同様に簡単だった

学校に行くことが無い所為か、必然的に友達も出来ない

つまり今までずっと独り身なんだ、僕は

そんな唐突に他者との関係が恋しくなった僕は、

鍵と携帯を持って玄関を出た

腕には久しぶりに、緑色の腕章を付けながら

「すみませーん、通してもらえますか？」

受付係の人に僕はそう問いかけた

風紀委員

主に学生により構成されている学園都市の警務組織で、
学生関連の犯罪を取り締まる役目を果たしている

表向きとして僕はこれに所属している

最近はまだ顔を出していなかったけどね

その中でも僕にとっては原点となる場所、
風紀委員第177支部

そこに久しぶりに僕は顔を出した

「あの、どちら様でしょうか？」

受付係の人は不思議そうに僕を見た

何ヶ月も顔を出していない所為か、それ以前にフードを常に

被っていた所為で素顔がまったく知られていないからなのか
誰も僕のことを知らない

まあ、素顔を知ってる人なんて本当に限られた人だけだ

「一応は元風紀委員第177支部所属の榎原という者ですが」

「榎原様ですね、少々お待ちください」

彼女は電話を取り出し、何処かへ連絡した

しばらく会話を交わした後、ようやく
電話を切り、僕の方へ視線を移す

「確認が取れました、お通りください」

ようやく奥へと僕は入れてもらった

受付係の人に一例をし、僕は階段を上がり
奥へと進んだ

「お邪魔します」

一応は挨拶をし、僕は扉を開く

中は簡単な事務所のような場所

この場所こそ、書類や取調べなどが
執り行われる僕の元担当部屋だった

現在は後輩に任せっきりだけど

「はい、どちら様で…」

中に居たのは、書類の整理などをしている小さな女の子

僕より微妙に小さいその子は突然やってきた僕を
不思議そうに見ている

見たところ小学生ぐらいかな？

そんな小さい子でも、腕にはちゃんと風紀委員の腕章を付けている

「元風紀委員177支部所属の檜原という者です」。何か暇だったんで
ちよつと遊びに来てしまいました」

ついでに付けている腕章を見せる

基本、風紀委員の事務所は関係者以外立ち入り禁止だ

つまり事情を知らない彼女は間違えて僕を
逮捕しようとするかもしれない

そんなのはご免だよ

「は、はあ…」

とりあえずは彼女はお辞儀をした

「ま、座ろうよ。お茶でも飲もう」

椅子に座り込み、彼女に手招きする

今はフードも被っていないし、普通の制服のままだから怪しくもない

だから変態やロリコン扱いはされないよね？

「いえ、ですが私には仕事が…」

「いいからいいから。仕事は待ってくれるさ」

少し控え気味に彼女は椅子へと腰掛けた

僕は丁度置いてあったお茶を湯飲みに淹れ、彼女に渡した

そして、適当の机の引き出しを漁ると和菓子も取り出し、僕たちの間に置く

「改めて自己紹介するけど、僕は元177支部の檜原秋。
気軽に秋とも”アキ”とも呼んでいいよ」

「先輩を名前で呼ぶのは少々気が引けますわ。私は白井黒子。
現在はこの第177支部に所属させてもらっています」

白井黒子さん、ねえ

その歳で風紀委員とは、中々の資質だね

これは将来どれくらい強くなるのかが楽しみだよ

「榎原先輩は元々177支部に所属していたのですか？」

「うん、そうだよ。あの頃は凄く楽しかった。風紀委員としての活動はとても楽しかったし、何より他人の笑顔を見れるのが凄く好きだった」

風紀委員として他の人を助けた時、あの人たちの見せる笑顔は最高だったよ

とても輝いていて、幸せそうで、優しさで溢れている、僕まで気持ちよくさせてくれるような笑顔

それを見るのが僕にとって何よりの楽しみだった

「そんな僕からのアドバイスだよ。風紀委員という仕事は辛い時もあるし、難しい事件も起こるかもしれないけど、それをどうやって受け入れるかが大事なんだ」

白井さんは興味深そうに僕の話聞いてくれる

素直に聞かれるのは正直嬉しい

「何時までも失敗を引き摺るんじゃないくて、その失敗を受け入れて、

” 次回は完璧にこなしてみせる ” って意気込みを持てばいいよ」

「貴重な教えをありがとうございます、榎原先輩」

綺麗にお辞儀をしてくれた

それを僕は満足そうに笑みを浮かべながら見詰める

こういう若い時から風紀委員をやってくれていると、これからの風紀委員の未来がかなり楽しみになってくる

僕達の世代から彼女たちの世代へと交代していかないといけない

お茶を口へと運ばせる

「白井ー！ もう書類は片付いた？」

すると、後ろのドアが開き、とある声がこの部屋に響く

高い声質でありながら、その力強い声はとても

幼く聞えるが、その持ち主は列記とした高校生みただ

後ろを振り向いて僕はその人物を確認した

背は女子としては高く、160センチはありそうだ

長い髪は腰の辺りまで伸びていて、僕はそんな彼女と視線を合わせるためにはかなり上を見上げなければいけなかった

その人物は僕を見ると、真っ直ぐとこちらへ歩いてきた

「白井、その人は誰？」

僕を指差しながらそう言う

「この方は檉原秋さんです。元々この支部に所属していらした方でして、訪問してくださいました」

彼女の説明にその子はジッとこちらを見つめている

そして…

「アキくん久しぶりー！」

とんでもないスピードで僕を抱き上げて、ぬいぐるみのように抱きついてきた

一瞬にして椅子から持ち上げられた僕は彼女の腕の中に埋められた

前は見えなかったけど、いきなりの出来事に白井さんは「え！？」と驚いていると思う

正直、僕もかなり驚いている

まさか、こんなところで彼女に会うなんてね

「離してくれないかな？」

「あ、ゴメンね！ 久しぶりに会ったからつい…」

申し訳無さそうに僕を椅子に下ろしてくれた

このやり取りの間、僕は表面上では一切動じることなく、
再びお茶を口へと運んだ

「えっと…二人は知り合いなのですか？」

気まずそうに白井さんは僕たちに訊いてきた

「知り合いも何も、彼女は僕の元仕事仲間の
きついでなか あかね
雲母坂明音。僕にとってはかなり厄介な人だ」

「厄介とは失礼な！ あたしの何処が厄介なのよ！」

”全部”と言いつことになる自分を押さえ込む

ここで彼女と会つのは正直かなり予想外だ

僕はこの177支部に所属している時、同期で
入って来たんだ

その年唯一の新人だったため、僕と明音は
パートナー同士となって仕事をこなした

僕がこの支部を離れるまでずっと一緒だった、いわば
”友達に近い”存在だ

「失礼ですが、榎原先輩はおいくつなのですか？」

僕は自分で答えようとするが、明音がそれを遮った

「もしかして白井、アキくんを知らないの？」

榎原秋、全ての学園都市風紀委員を纏め上げる存在、『風紀委員長』という地位を持ち、加えて、学園都市レベル5序列第三位の超能力者よ？」

僕に關してのことをほとんどばらす明音

この時、白井さんの表情は表現できないほど
凄まじいものだった

第二話 暗部関係者（後書き）

主人公の名前がやっと判明

実は以前投稿した短編から変えました

ちなみに主人公の名字、檉原とオリキャラの名字、雲母坂は両方とも京都の地名です

主人公の能力もバレバレですね

予想しないで欲しいです、バレバレを認めたくないですから（↑おい

第三話 風紀委員長（前書き）

遊びまくって疲れ切ってでの投稿です（苦笑）

ここ数日は元旦や新年の大掃除で投稿が遅れると思いますが、
気を長くして待ってくださいれば幸いです

ちなみに次回からは超電磁砲の時間軸に飛びます

急展開？ それは作者の自己満足ということでお許しください（泣）

第三話 風紀委員長

「はあ…なんで僕が…」

まだ明るい昼の時間帯

僕はとある現場へ向かうために歩道を歩いている

理由としては、明音に仕事を言い渡された

先ほど立て籠もり事件があつたと通報があり、人手不足もあつてか僕がその仕事を言い渡された

元々風紀委員長としての仕事を完全にサボっていた僕

案の定帰ろうとした僕は呆気無く捕まり、あえなく御用となった

僕は風紀委員の仕事を任され、その現場へと向かう羽目になる

溜め息を吐きながら、歩道を歩いた

「貴方、本当に風紀委員長ですの？ 仕事をサボる風紀委員長なんて聞いたことがありませんわ」

そんな僕の横を歩くのは、支部で会ったあの小学生、白井さんだった

まだ入ってから一年しか経っていない新人の白井さんに
経験を兼ねて僕に着いていかせるらしい

まったく、迷惑この上ないんだけどね

「この不真面目さとだらしなさこそが僕のアイデンティティさ」

「胸を張ってまで言うことではないと思いますわ」

僕の誇りを貶さないで欲しい

「そんなことより着きましたわよ。あれが現在立て籠もり犯の潜伏している

と言われている民家ですの」

それを”そんなこと”で片付ける白井さんは無自覚で毒舌らしい

多分将来は結構おかしい人になるんじゃないのかな？

軽く肩を落としていると、背中を叩かれ姿勢を正される

小学生に注意される高校生って、どうなんだろう…？

僕達の着いた家は大騒ぎを起こしていた

窓は硬い鉄を貼り付けられ、ドアには内側から何本も木の板でバリケードされている

中の様子も伺えないとは、完全に手詰まり状態だね

「こんにちはあ、警備員の皆さん！ お仕事ご苦労様ですね！」

僕はそんな緊迫状態の中、朗らかな声で警備員の一人に挨拶した

その人は僕を振り返ると、腕の腕章を見て頷いた

「君達が増援に来てくれた風紀委員の子達か？」

「一応僕はそうですね。隣のこの子は場慣れのために着いてこさせました。状況は？」

僕は白井さんを一旦突き放し、一対一で警備員と向かい合った

「現在人質は家の女性一人とその子供。一部始終を見ていた証言者によると

敵は二人組で銃で武装している。現在は現金七百万円を要求している」

典型的な人質犯だ

金目当ての反抗で、尚且つ雑でミスが発見し易い

元々人質での金銭要求というのは成功例なんて殆ど無い

ほぼ全員がその内捕まってしまい、悪い時は

その場で突入されて御用になる連中も居る

結論から言うと、立て籠もり犯は金目当ての時はあまり良くない

「まさにテンプレ的な立て籠もり犯ですね。まったく…呆気無さ過ぎて

笑えますよ。僕ならもっと巧妙に策を練って慎重に物事を…」

「そんなことは良いから！とにかく、今は人質を傷つけず犯人を逮捕するのがセオリーだ」

ふざけた発言に警備員はイライラしたように怒った

「何そんなにムカムカしてるんですか？それを僕みたいな草食系男子に向けないでくださいよ。あ、もしかして貴方友達少ないんじゃない？」

「本当にイライラする子だな君は！」

延々と喋る僕を見て、頭を掻きながら憂鬱そうにそう叫んだ

明らかにイライラしていて、機嫌が良いとは思えない

何でだろうね

「ま、この程度の人質なら問題ありませんよ。僕が家の中に入りますから他は犯人が万が一逃げたために見張っておいてください」

「なッ！？ そんなの駄目に決まってるだろ！人質になにかあったらどうするんだ！」

僕の提案を即答で却下する警備員

おそらく僕のことはまだ小学生とか思ってた、高校生とはまったく思っていないんだね

まあ、こんな勘違いには慣れてるけど、さすがに少し傷付くなあ

「安心してください。僕はこう見えても高校生ですし、レベルもそれなりに高いですし」

僕の高校生という言葉に驚いたような表情を見せる警備員

その間にも僕は家へと向かっている

「ちょっとお待ちくださいませ！　まさか一人で向かうつもりですの！？」

さっきまで樂觀していた白井さんが僕の元へ駆け寄る

かなり焦った表情で僕が起こそうとしている行動に疑問を述べている

「まあ、その方が一番安全なんだけどね。人数が多いと犯人が怖くなって人質を傷つけるかもしれないし、僕一人で十分だしね」

大勢で突入すれば制圧できる確立は上がるけど、人質のリスクも上がる

それに、逆上した犯人が色々と厄介な行動を起こしてしまう

これは僕が長年風紀委員を勤めた経験からの推測だよ

まあ、殆どの場合は当たるんだけどね

「幾ら貴方がレベル5でも、一人で向かうのは無茶過ぎますわ！」

「違うね白井さん。レベル5だからこそ一人で向かうんだよ」

この言葉に疑問符に首を傾げる白井さん

「僕たちレベル5は一人で軍隊と戦えると言われてるの。つまり、それほど能力が巨大だって意味なんだよ。分かる？ 巻き添えになりたくないだろ？」

僕はあえて少し威嚇しながら白井さんにそう告げた

元々僕の逆境定式インサイドアウトは多対一に一番向いているんだ

もちろん、一対一でも十分過ぎるほど戦えるけど、多対一こそ一番本領を発揮できるんだ

つまり、白井さんには巻き添えをくらってしまう確立が高くなる

同じ風紀委員の部下を傷つけるのは一応風紀委員長の僕としては少しどうかと思うしね

「ッ……！ 分かりましたわ」

とりあえず納得してくれた

僕はそれにそっと笑みを浮かべ、頭をごしごしと乱暴に撫でた

そして、そのまま民家の正面へと行く

中から男二人の話し声とすすり泣くような声が聞えるところから

どうやら作戦会議などをしているみたいだ

敵陣地で堂々と作戦会議するのは感心できないなあ

僕は足を持ち上げ、ドアに向かって突き刺した

貧弱体質の僕が蹴ったのにも関わらず、ドアは盛大に弾け飛んだ

「なッ！？」

中でなにやら会話をしていたマスクを被った男達が驚きの声を上げた

突然乱入していた僕に驚愕しており、まるで今こんな小学生みたいな子供が

貼り付けにしてい扉を蹴り飛ばしたとは思えないのだろう

甘いなあ

青二才風情の常識が僕の逆境定式インサイドアウトに通用するはずが無いだろ？

「てめッ…！ 誰だ！」

銃を人質にされている家族に突きつけながら僕に問いただしてきた
明らかに焦っており、予想外の自体に対処できていない

「風紀委員の榎原という者でえゝす！ 今日なんかアンタ等が
めんどくせえと警備員から”チクリ”があつたので僕が態々出向き
ましたあゝ！」

容赦なく人生の底へ墮おとしてあげるので迅速にこちらへ投降してく

ださい」

朗らかに、人懐っこくそう言ったが、内容は残酷なものだった

要するに省略すると、”人生滅茶苦茶にしてやるからさっさと捕まれよ”って言いたかったんだあゝ

まあ、それを素直に受け入れてくれるとは思っていないけど

「んだとてめえ！　ぶっ殺すぞクソガキ！」

案の定、銃を向けながら凄まじい形相でこちらを睨んできた

しっかりと引き金に指をかけ、いつでも発砲できる状態になっている

伊達に人質取ってないからね、銃の扱いがちゃんと基礎が出来ている

今時珍しい、計画性のある犯行だよ

まあ、あんな玩具なんて利かないけど

「そんな玩具向けられても無意味なんじゃないんですか？
それ以前に青二才風情の貴方達の銃撃技術なんて塵屑以下だと思えますし」

「ぶっ殺す！」

激怒した二人組は容赦なく引き金を引き、僕に向かって銃を乱射する

大きな音と共に無数の銃弾が発射されている

「ぎゃアアアア!!」

すると、逆に二人組の男達が血飛沫を上げながら悲鳴を上げた

服からは血が滲んでおり、何かが貫通しているのが分かる

何が起こったか分からないように目を見開いている

「あはは！ バゝカ！ 相手の能力も知らないのに
なに攻撃しちやってるんですかぁ？ そういうのは命取りですよ？」

「て、てめえの能力は…」

「僕はレベル5の逆境定式でえゝす！」
インサイドアウト

元氣良くそう告げるが、それとは対照的に男の片割れは
恐怖に染まったように表情を歪めた

現在八人しか居ないレベル5の一人が目の前に立っているのだから
不思議じゃないけど

一人で軍隊と戦えると言われているほど

つまり、二人で軍の歩兵中隊と戦うに等しかった

まあ、自分の本当の実力なんて実際は分からないけど

少なくとも第一位の一方通行や第二位の未元物質アクセラレータ
ダークマターには負けるだろう

し

「お前…あの第三位なのか…？」

男は僕の言葉が信じられないのか目を見開いている

「うーん、そうなんじゃないの？ 序列なんて僕が決めるものじゃないけど、

自分の能力が研究対象として有望されてるし、多分そうだと思うよ」

「ク…クソがアアア！！！」

このまま捕まるのが嫌だったのか、男の片割れは懐からナイフを取り出し僕に向かってきた

だが、そんな彼を見て僕はそっと微笑んだ

「グハツ！？」

男は突然天井に向かって飛び上がった

いや、正確に言うと突然空中に放り出されたように宙に浮いて、物凄い勢いで身体を天井に叩きつけていた

そして、それが嘘かのように地に真っ逆さまに落ちてくる

「駄目だなあゝ人質犯さん！ 恩を敵で返しちゃいけないじゃないか！」

「恩…だと…？」

「そつだよ！ どうせアンタ等は警備員達の突入で制圧されてい
たし、
運が悪かったら銃撃されて殺されていたかもしれないんだよ？ だ
から態々

僕自らが君達を優しく制圧して命まで残してあげたんだ――

感謝してよね？」

僕は男の胸ぐらを掴み上げる

そして、何度も拳を彼の顔面に突き刺した

何度も、何度も、何度も殴った

その度に男はうめき声を上げ、彼の口から
飛び散る血が僕の顔に飛び散る

それでも笑顔を崩さないまま僕は男を殴り続けた

骨が折れているのか、血が鼻から流れ出ている、
口からは同じく赤い液体が滲み出ている

拳を振るうたびに赤い雫が民家の床へ落ち、丸い染みを作っている

「やり過ぎですよ、風紀委員長」

そんな僕の振るおうとした拳が何者かに止められた

ゆっくりと後ろを振り向くと、そこには

何とも言えないような表情になっている白井さんが居た

血塗れになっている男二人と怯えきつている家族二人を
交互に見ながら、視線を僕に移した

「あ、白井さん。ゴメンゴメン、久しぶりの仕事で調子に乗っちゃ
った」

「調子に乗った」じゃ済まされないですよ？ たとえ犯人で
あろうと
ここまでの状態に追い込むのは同じ風紀委員として方っておけませ
んわ」

僕の言い訳に負けずと強い声質で反論してきた

これは立派な風紀委員サマだね

うん、お兄さん感心」

「なッ！？ これは…！」

そんな中、外で待機していた警備員の部隊がこちらへ到着した

中へ入るや否や、犯人二人の惨状を見て驚きの声を上げた

「後の処理はお願いしますねえ、じゃあ僕はこの辺で」

僕は警備員に一礼すると、そのまま歩道へ戻った

白井さんも手招きすると、僕の後を着いてきた

「どうだった、この人質事件は？」

人質事件なんて新人の彼女には初体験だろうし

そう訊くと、彼女は機嫌が悪そうに答えてくれた

「アレはやり過ぎだと思えますの…」

僕の仕事を初めて見た誰もが言う言葉

”やり過ぎだ”

でも、僕はそれが苦に思ったことは無いよ？

だって、これは誰もが通る風紀委員としての”通過点なんだから”

「そっか、君は新人だからまだ知らないんだ。

僕の風紀委員長としての姿勢を」

「風紀委員長としての姿勢？」

僕のその言葉に白井さんは首を傾げた

「やり過ぎじゃなきゃ風紀を護れないんだよ」

第三話 風紀委員長（後書き）

改めて見るとなんか雲。みたいですね

何故作者の主人公はめ。か。ックスに似てしまいのでしょう…？

ぶっちゃけると最後の台詞は丸パクリです（↑おい）

次回の更新は何時になるか分かりません

まだもう片方が優先なので、もう片方が
落ち着いたらこちらの投稿もペースを上げたいと思います

第四話 絶対能力進化実験（前書き）

もう片方が手詰まり状態

なのでまだ書きたいことやネタがかなり豊富な
こちらを先に更新します

駄目文ですが、どうぞ

第四話 絶対能力進化実験

学園都市第七学区の住居地帯

比較的多数の学校がこの第七学区に存在しており、それに比例して学生たちの住まう学生寮も多くがそこに建っている

冬の名残があるのか、肌寒い五月の寒さが僕の身体を駆け巡る珍しく温度は二十度を下回り、十一度ほどの寒さになっている

そんな中、制服の上にパーカーを一着だけ着ている僕は寒さのあまり身震いしてしまった

普通ならば家に帰ってこたつに潜伏していたい僕だけど、今日はそれが叶わなかった

遠回しに言えば”避けられることの出来ない現実”

要約すれば、仕事だよ

僕は一つの学生寮の屋根から路地裏を見下ろしている

そこには、二人の人物が対峙していた

片方は見たところは普通の女の子

普通の冬服の制服、どこにでも居そうな茶髪

まあ、頭に装着している軍用ゴーグルは少し奇妙だけど

それでも、その点以外を除けばどこにでも居そうば
普通の学生

でも、もう片方は”普通”とはかけ離れている格好をしていた
純白の髪に中性的な顔立ち

この暗闇の中、彼の真つ赤の目はその白い髪の所為で
かなり目立っていて、獣のような眼差しだ

そして、生命をまったく感じさせないほど白い肌
太陽など知らないと言ってるかのように白かった

そんな普通とはかけ離れた人物が何故まだ顔に
幼さが残るような学生と対峙しているかという、実験だよ

実はあの学生、ただの人間じゃないんだ

あの学園都市レベル5第四位、御坂美琴さんのクローン体だ

人間のクローンは国際法違反だけど、学園都市の裏社会じゃ
こういう汚いことは普通だよ

そのクローンが対峙しているのは、あのレベル5第一位

学園都市最強を誇る最高の超能力者、一方通行だアクセラレータ

核兵器を発射されても無傷で居られるほど巨大な力を持つ
一方通行は、他のレベル5に絶対的な差を付けて第一位に居座っている

一見ミスマッチな組み合わせのこの二人が一緒に居るのは、とある実験のため

名は『レベル6シフト絶対能力進化実験』

内容は至って簡単だよ

現在製作されている第四位のクローンは二万體

一方通行はその二万人のクローン、通称“シスターズ妹達”を
二万通りの戦闘で殺せば絶対能力者へと進化できる

そして、一方通行は誰もたどり着いたことが無い、神の領域に足を踏み入れることになる

それがこの実験の目的であり、学園都市本来の目的だよ

今は第6491次実験だから道のりはまだ長いけど、
一方通行にとってはおそらく簡単だと思うけどね

まあ、死ぬほど退屈でもありそうだけど

ゲームで言うなら、マリオがクリボーを二万回殺して
残りライフを限界以上に上げるぐらい退屈だよ

僕はそれをやったことがあるけどね

で、僕の仕事もそれぐらい退屈な内容なんだ

僕の役目はこの実験を監督し、何か異常があればそれを正すこと

球技で言う”審判”だ

まあ、基本は一方通行の圧勝で終わるから異常もクソも無いんだけど

ちなみにクローンの存在は知られてはいけないため、実験は今のところ全て”室内”で行われている

室内と言っても、今回は殆ど外と変わらないけど

今回の実験はいつか室外へ出る時の予習みたいなもので、外を見立てた施設での実験なんだよ

建物も忠実に再現され、夜の暗さや外の温度までほぼ一致しているまあ、”施設”ということもあって天井はかなり低い位置にあるんだけどね

そんな環境の中、実験は進められた

「では、これより第6401次絶対能力進化実験を開始します。一方通行は指定された位置へと向かってください」

やっと始まった実験

まったく、いくら外を再現していても温度まで再現しなくなつて良いじゃないか…

これじゃあ僕が風邪を引いちゃうよ

クローンの子、まあ面倒だからミサカさんって呼ぶけど

ミサカさんは頭に装着していたゴーグルを目へ移動させる

そして、地面に置いてあつた新型F2000R突撃銃を拾い上げ、銃口を一方通行に向けた

旧型のFN F2000より性能は遥かに向上した、学園都市製の
アサルトライフル

本家のFN社より性能が上なのはやっぱり学園都市の技術力だね

その玩具のような外見から別名オモチャトイソルジャーの兵隊と呼ばれている

とまあ、そんな武器でも一方通行にとっては本当に玩具なんだけだね

「そんなモンが俺に通用するとも思つてんのか、オマエ？」

案の定、一方通行は僕が考えていたこととまったく同じことを言った

「ッ…！」

それに苦い表情をしながらも、ミサカさんは銃を発砲させた

5・6mm弾が脅威の速さで連射される

それは真っ直ぐ一方通行に向かっていったかに思えた

でも…

「ぐッ…！」

その弾が一方通行に当たったと思ったら、それは
真っ直ぐミサカさんに跳ね返されていた

まるで僕の逆境定式のように

鮮血が飛び散る

自らの銃弾によって打ち抜かれたミサカさんはそのまま倒れこんで
しまった

「さて問題です。オマエは俺に銃を連射してんのに、
俺は無傷なのは何故でしょう？」

「反射…」

ミサカさんはそう見解している

でも、ちょっと違うんだよなあ

「残念！ その回答だと三角しかやれねエなア。
答えはベクトル操作！」

”ベクトル操作”、それが学園都市最強の超能力者、
一方通行の能力

彼は自分の皮膚に触れた物質の向きを操作できて、
運動量、熱量、光、電気量、ありとあらゆるものが操作可能

通常時は”反射”に設定されていて常に彼の周りには反射の膜がある
その所為か、向かってくるものの全てが反射されてしまう

つまり、どんな攻撃でも”向き”があると一方通行の
前では無力に等しいんだ

だから核弾頭であろうと彼に傷を一つ付けることも出来ない

そんな前代未聞のチート能力を所持しているから彼は
学園都市の第一位として君臨している

ぶっちゃけ、僕や未元物質より研究対象としてもかなり有望されて
いる

まあ、彼の性格上大人しく従うかと訊かれると、頷けないけどね

「ありとあらゆる”ベクトル”を操ることの出来る俺は、
こういうことも出来ンだよ」

一方通行はミサカさんの腹を蹴った

すると、見るからに少ししか力を出していないのに、ミサカさんはトラックに撥ねられたように吹き飛ばされた

「運動量のベクトルを操作すれば俺の足には衝撃が来ねェし、相手には倍のダメージを与えられンだよ」

一方通行は得意げにそう告げた

応用方法もかなり豊富なのがあの能力の怖いところだよ

そして、そのままミサカさんは建物に激突してしまった

「うわぁ…」

僕は思わず声を漏らしてしまった

凄まじい力によって強力な衝撃があゝの建物に直撃してしまい、壁が崩壊したのも働いて建物が前に倒れてしまった

当然、壁に激突した本人は建物の前に居る

従って…

「おい、実験終了か？」

あゝの建物に潰されることになる

僕は見物していた屋根から飛び降りて、崩壊した建物へと駆け寄っていく

煙が段々晴れると、ミサカさんの姿はそこには無い

瓦礫の中に埋もれているのか、まだ姿を現していなかった

でも、地面にはしっかりと鮮血が飛び散っている

それは瓦礫の下からも漏れていて、大量の
血が水溜りのように流れている

確認するまでも無いさ

「第6401次絶対能力進化実験、一方通行の勝利で終了、っと」

僕はそう合図した

すると一方通行はつまらなさそうに舌打ちをすると、
こちらへと歩いてきた

「ちッ、つまらねエなア。いい加減こんな欠陥品の相手をするのは
飽きてきたンだが、もう少し面白くならねエのか？」

「文句言つなら辞めればいいでしょ？ 僕に八つ当たりしないでく
れ」

それに、見ているこっちだってつまらないしさ

「でもよオ、オマエだって第三位なンだろ？ なら俺の
考えくらい分かるだろ？」

強すぎる故に、自分と対等の奴と戦いたいって気持ち？

僕はそれに乾いた笑いを漏らした

「別に無いさ。そもそも僕は弱いんだから、君みたいな最強の気持ちなんて分らないよ」

「良く言いやがるな、てめエの逆境定式的能力ぐらい俺も知ってんぞ？」

「まあまあ、明日から妹達も外部研修が始まるんだし、君の実験にも少しは新鮮味が出るかもよ？」

僕は苛立ちを感じている一方通行を落ち着かせようと声を掛けた

一方通行は一つ溜め息を吐くと、そのまま頭を乱暴に掻いた

「そういやアオマエは何でこんな実験に手を貸すんだ？オマエにはなんのメリットも利点も無エはずだぞ？」

珍しく一方通行は僕に訊いてきた

いつもだとかつちが話し掛けるだけなんだけど、今回は一方通行からの質問だった

あはは、珍しいこともあるんだね

「利点…ねえ。少なくとも僕はそんな物は求めていないよ」

「求めてねエ？　ならなんでこんな実験を手助けしてんだよ？」

ましてや風紀委員長のオマエならこれを止めるはずなンじゃねエのか？」

ガマンできず、僕は彼の発言に大声で笑った

それに一方通行は奇怪な目で僕を見ている

「君、少し勘違いしていないかい？　僕は確かに風紀委員長だよ。でも君は分かっていることがあ

僕は”肩書きだけの正義”なんだよ」

僕の言葉に一方通行は疑問符を浮かべている

「僕は自分が悪だとは思わない。かと言って正義だとも思っていない。

全世界を滅ぼそうとかそういうのは考えていないし、世界に平和を齎そうとかも

まったく考えていない

肩書きだけの正義、表向きの正義

表は風紀委員長、裏では暗部の仕事を請け負う悪党

どちら側にもついていないし、どちら側を支持するつもりも無いよ

僕はただ、色んな人に感謝されたいだけなんだ

それが”偽善者”である僕のいわば”目的”だよ」

流れるように僕はそう言った

偽善者、偽悪者、正義、悪、そのでも当て嵌まる
曖昧な立ち位置に居るのが僕

それこそが僕の本当の素顔であり、本心でもある

「……オマエ、俺より頭がぶっ壊れてねエか？」

君にだけは絶対に言われたくないね

「覚えておきなよ、一方通行

風紀委員長にだけは”正義”を求めちゃいけないよ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3419z/>

とある偽善の風紀委員長

2011年12月28日12時52分発行